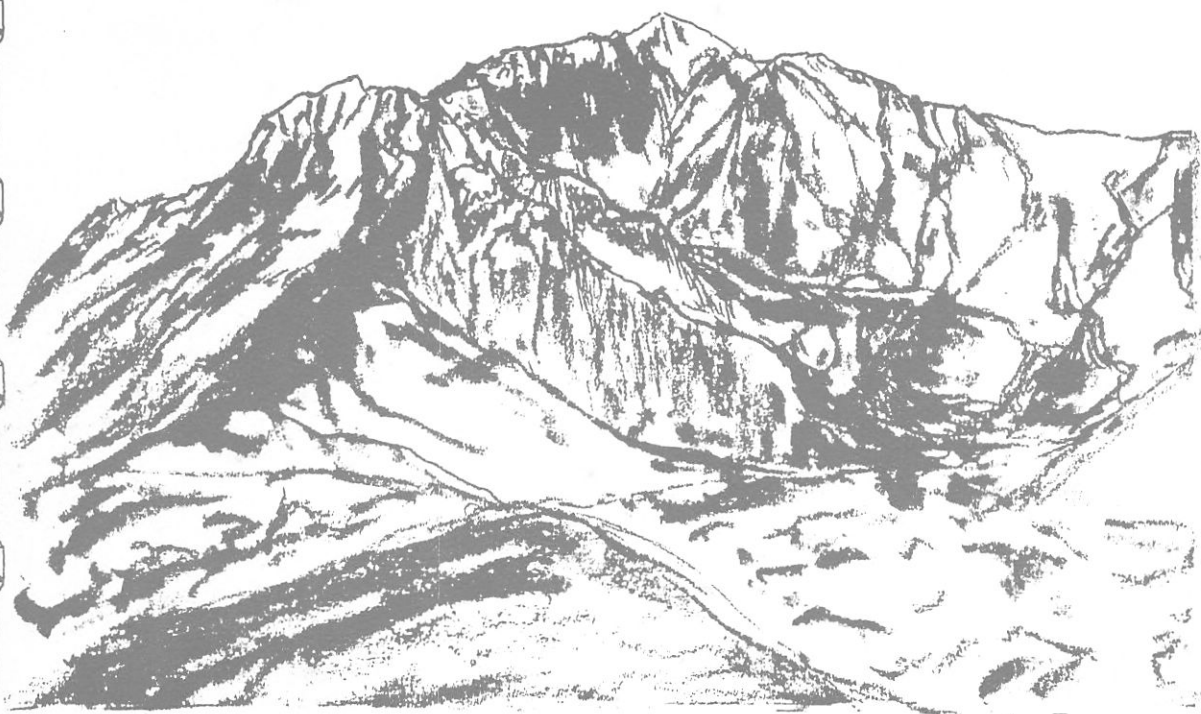


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 25号

1997年 4月～6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 97' 春 No25



剱岳ハッ峰主稜の登攀 《photo by M. FURUYAMA》

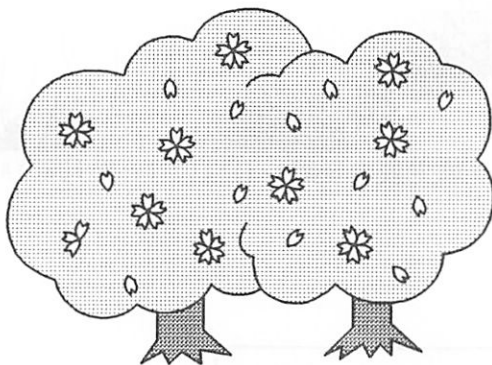
雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

登山技術訓練の中には自分のためのものと、パートナーのためのもの（しいては自分のためであるが）とがあると思う。岩登り技術などは前者であろう。確保技術は後者かも知れないが、失敗すれば自分も引き込まれることを考えると、自分のためと言っても良いだろう。これらの技術は基礎の訓練をしておけば、応用技術は本番＝訓練で登っているうち身についてくる。救助技術も後者であろう。これは本番＝訓練にはならない。訓練＝訓練、本番＝本番しかない。だから訓練がなければ本番にできるはずがない。本番にあう機会は滅多にない。またあっては困るのであるが。年一回行っている救助訓練には多数？の参加をいただき感謝している。

さて、当会の行っている訓練は搬出訓練だけである。これで十分なのだろうか。助け出した人間がケガをしていたり意識がなかった場合どうしたら良いだろうか。このとき役に立つのが救急法や心肺蘇生法である。先般行われた県連救急法講習会には当会から4名の参加者があった。医者、看護婦、既に講習会を受けた者を除いても、当会では半数以上の者が救急法を知らないのではないしょうか。私は受講を義務化すべきだと思うがいかがだろうか。せめて5年に一回は講習会を受けて

ほしい。皆よく考えればわかると思うが、パートナーが意識不明になった時、人工呼吸や心肺蘇生法など出来る限りのことを施すと思う。少なくとも私はやる。できるだけことはやってみる。もし自分がそうなった場合、パートナーがなにも知らないとしたらどうなるだろう。そのまま何もされないまま死ぬのを待つことになる。ただ呆然と見られているだけだ。心肺蘇生法を施せば生きられる者も生きられないのだ。わたしはそんな奴とパーティを組みたくない。最近は正式名称は知らないが、水難救急法なるものもあるらしい。講習会内容も知らないが、もし溺れた者への救助法や救急法だったら受けてみたいと思っている。当会も沢登りが多くなってきているので、有効な講習会であると思う。他の人のための訓練と前述したが、皆その知識を身につければ、回り回ってそれは自分のためなのである。もう一度救急法を見直し、会員全員がその知識を身につけてもらいたいものである。

（本図一統）



《目次》

1997年 春号 4月～6月 ACC-J 茨城

巻頭言	・・・ 1
集会報告	・・・ 3
山行報告	・・・ 4
唐沢岳東尾根	・・・ 5
鳥甲山	・・・ 7
五竜岳GⅡ中央稜	・・・ 8
浅草岳スキーツアー	・・・ 9
『春山合宿前半ー剣八ッ峰主稜	・・・ 11
剣岳源治郎尾根	・・・ 13
剣岳合宿八ッ峰上部	・・・ 14
前剣東尾根右稜	・・・ 15
平ヶ岳彷徨	・・・ 16
那須岳 苦土川 井戸沢	・・・ 18
奥多摩 後山川 青岩谷	・・・ 19
月山山スキー	・・・ 20
谷川岳幽の沢中央壁正面フェース	・・・ 21
中川川 東沢 本棚沢	・・・ 22
平標山	・・・ 24
幽の沢中央壁左フェース	・・・ 25
友好団体の月報・会報・その他	・・・ 27
編集後記	・・・ 29

表紙絵…LANGTANG・RI (ランタン・リ) 7239m

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 4 月 】-----

4 月 2 日

出席者 本図、菊池、鯉河、古山、紺野

4 月 16 日

出席者 本図、菊池、古山、紺野、告、村上、坂本(恵)、中居、木村、鯉河

-----【 5 月 】-----

5 月 7 日

出席者 本図、古山、木村、中島、菊池、澤田、告、坂本(恵)、紺野、村上、中居

5 月 14 日 《リーダー会》

出席者 本図、木村、鯉河、古山、菊池、告、生井

5 月 21 日

出席者 本図、古山、新美、木村、村上、笹平、紺野、坂本(恵)

-----【 6 月 】-----

6 月 4 日 《総会》

出席者 本図、古山、木村、鯉河、菊池、中居、村上、笹沢、告、笹平、高木、坂本(恵)、生井

6 月 19 日

出席者 本図、古山、菊池、木村、村上、笹平、告、新美

山行報告

《 1997年 4月～6月 》

---【 4月 】---

4月12～13日	唐沢岳・東尾根～西尾根～D沢	L古山、紺野
4月 13日	鳥甲山	L本図、告、村上、坂本(意)
4月19～20日	五竜GⅡ中央稜	L古山、本図
4月 27日	浅草岳	L中居、坂本(意)
4月 29日	岩トレ・御岩山	L本図、村上

---【 5月 】---

4月29～5月4日	《春合宿》	
4月29～30日	ハッ峰主稜	L高田、古山、澤田
5月 2日	源治郎尾根	L古山、澤田
	ハッ峰上部	L告、紺野
5月 3日	前剣東尾根右稜	L古山、本図、紺野、坂本(意)
5月3～5日	平ヶ岳山スキー	L松原、吉田、木村、中島
5月 12日	那須・苦上川・井戸沢	L本図、村上、坂本(意)
5月 18日	奥多摩・青岩谷	L本図、村上、坂本(意)
5月 24日	月山山スキー	L木村、菊池、中島

---【 6月 】---

6月 1日	救助訓練・古賀志山	L古山、本図、木村、菊池、告、澤田、新美、 笹平、村上、紺野、坂本(意)
6月 8日	谷川岳山の沢中央壁正面フェース	L古山、新美
6月 8日	丹沢中川川東沢本棚沢	L本図、澤田、高木、坂本(意)
6月 15日	平標山	L村上、坂本(意)
6月 15日	谷川岳山の沢中央壁左フェース	L古山、告、新美

唐沢岳東尾根

1997. 4. 12~13

パーティ L古山正文、紺野哲雄

4/12~13日にかけて、古山さんと紺野で、唐沢岳に行ってきました。前日の夜9時に下館を出発しまして、現地に着いたのはすっかり深夜でした。しばしの仮眠を取り、翌朝6時に出発しました。起きた時は寒いような気がしましたが、この日は天気が良いようでした。

出発地点の七倉ダムからは、しばらく道らしいものがあるような、無いようなといった感じで樹林帯の中の急登が続きました。この辺りはもう雪は殆ど無くなっていました。しばらく行くと最初のピーク1646mに出ました。この辺りから雪稜ができました。トレールも無く全く人の気配もなく静かな感じでした。しばらく行くと岩峰1899メートルに突き当たります。ここはロープを出して左まきに雪壁を登り2ピッチで抜けました。この後にもう一カ所雪壁で2ピッチ、ロープを出しました。山頂に着いたのは4時でした。風が強い為とても寒かったので、西尾根へと下りました。途中の樹林帯の中でビバークする事にして、ツェルトを張りました。今回はシュラフを持っておらずシュラフカバーだけなので縦穴を掘り、ブロックを積んで完璧にツェルト



唐沢岳東尾根

を張った。しかし、夜中に湯タンポなどをつくり夜を明かしました。

4/13、6時45分出発。西尾根からD沢を下降、唐沢から高瀬ダムへとD沢は雪崩の跡があり雪は固いのですが早く帰りたい感じでした。高瀬ダムから七倉ダムまでは舗装道路の上を歩きました。

4/12 七倉ダム《東尾根》(6:00) - 1646ピーク(8:35) - 1899m岩峰(11:00)
一頂上(4:00)

4/13 出発(6:45)《西尾根~D沢~唐沢》 - 高瀬ダム(8:50) - 七倉ダム(10:25)

(紺野 記)



東尾根にて…紺野



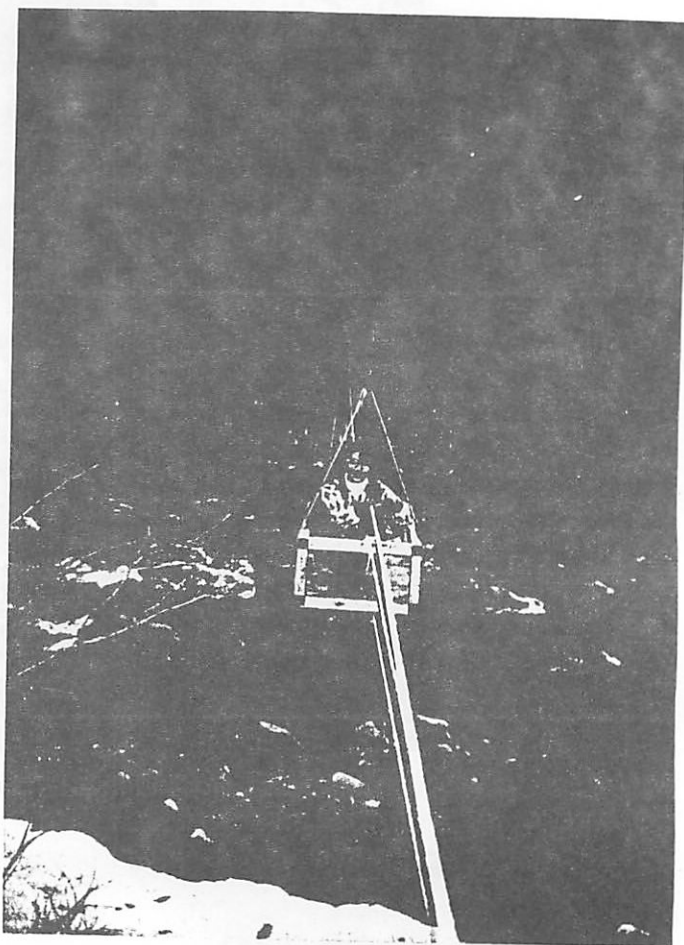
東尾根にて…紺野

鳥甲山

1997. 4. 13

パーティ L本図一統、告広道、坂本恵美子、村上晴美

春合宿の剣に参加するには、ちょっと体がなまり過ぎているなという訳で、このあやしげな名前の山に登るパーティに参加させてもらうことになった。久しぶりの雪山なので、ドキドキしてしまう。和山温泉から、籠渡しを利用して中津川を渡る。はじめてこのようなものを利用するので、少しこわいな～と思いながらもなかなかおもしろい。川の途中まで重力に従って滑っていき、そこからは自分でロープを掴んで対岸まで登る。ロープがあまりにも細いような、なんだか古くて切れそうな、とても心細い思いがする。無事川を渡り終り、登山口まで林道や舗装道を横切ったりしつつ歩く。告氏は持病の(?)腹痛のため、時々姿を消す。登山口からはいきなりの急登が始まり、そして続く。本図氏、告氏、坂本さんは快調にぐんぐん登っていく。空はピーカンである。岩稜部分は雪と岩と松のミックスで実にいやらしい。私は久しぶりのブラブーツ、アイゼン、ピッケルでよろよろしながら登っていくが、「これを登りきれば白くらのピークだろう」との思いも空しく、登っても登っても登りだけが続く。ついに村上の弱音が吐かれる。「本図さん、もう



籠渡しでの私(村上)

これ以上登れません。」は～、情けないことである。時間は午前9時、空には雲一つない。何故か、全員の撤退となる。

下りは速いものである。フキノトウをたくさんとり、温泉にゆっくりつかって「我ながら情けないことよ～、しかし雪を戴いた山はきれいで気持ちがいいな～、は～、極楽、極楽。」と、なんだか老人のつぶやきである。春合宿に参加することが出来るかどうか、とても不安になった山行となった。

(村上 記)

五竜岳GⅡ中央稜

1997. 4. 19~20

パーティ L 古山正文、本園一統

五竜岳東面は無雪期にはなんの魅力もない尾根であるが、雪が着くと素晴らしい尾根に変化する。今回は名前の由来にもなった、五竜菱の上を通る中央稜を登ることにした。取り付きはABCの3つのリッジのどれかだが、Aリッジから取り付くことにした。

19日晴れ。テレキャビン、リフトと乗り継ぎ地蔵の頭に着く。遠見尾根に行くパーティはいくつかあるが、どれも小遠見辺りまでのようである。天気は最高で暑くてたまらない。ここから見る鹿島槍北壁はいつ見ても素晴らしい。大遠見で戻ってくる単独行者と行き会う。北尾根を登りに来たが、下り口が分からず戻ってきたとのこと。昨日は悪天で新雪が20cm位積ったという。西遠見に彼が下ったと思われるトレールがあったが、確かにそこは違うところで、もっと上から降りなければいけない。さて我々も白岳沢に下りなければならないが、新雪表層雪崩が頻繁に起きている。すべて規模は小さいがやはり怖い。少し考えたが取り付き点を定め一気に走り抜けようとした。しかし悲しいかな息切れがしてしまい、沢底で休む

はめになってしまう。あんなに恐かったのに覚悟ができてしまうのか、恐さがそんなに感じなくなってしまうのだ。過去いつもそうだった。特に谷川東面の一の倉なんかでも、出合でシーンと静まりかえっていると、一発でかいのが出るかもしれないと不安になる。テールリッジまで行けば安心なんだがと悩む。そのくせ谷に入ってしまうと谷底で大休止したりするのである。

Aリッジ末端を整地しビバークサイトを作り、ルート工作に出かける。右側から取り付くが左側の方が良いことがわかり、ザイルを2ピッチフィックスする。時間をかけて作ったビバークサイトは快適そのものであった。

20日晴れ。フィックスを辿りルンゼからAリッジに取り付く。リッジといっても殆ど木登りであった。別段悪くもなければ快適でもない。ただ苦しいだけだ。この歳になってのモンキークライムは相当にこたえた。5ピッチも登ったころ中央稜に出て、もう木登りをしないですむかと思うとほっとする。この先傾斜もなさそうなのでザイルをしまう。時間もあることだし、ゆっくりと頂上



五竜GⅡ・・A尾根を登る

に向かう。GⅡピークには出ないで頂上とのコルに
でる。頂上はトレールもなく2人だけのピークであ
った。黒部川の向こうに10日後の合宿で行く剣が
見えた。合宿も天気に恵まれることを祈る。記念撮
影後、遠見尾根を下山した。

4月19日

リフト終点(9:03)―地蔵平(9:09)―GⅡ取付(13:03
)

4月20日

ビバーク地発(5:28)―A尾根終了(7:08)―五竜岳頂

上(9:14)―五竜小屋(9:59~10:29)―ロープウェイ駅(1
3:12)―駐車場(13:23)

(本図 記)



五竜頂上にて

浅草岳スキーツアー

1997. 4. 27

パーティ L中居康展、坂本恵美子

長いへき地巡りの後でようやく筑波に帰ってきた。
早速休みには山に行きたいと、およそ2年ぶりの集
会に顔を出す。さて4月から5月はやはり山スキー
である。当初は芝倉沢あたりにしようかな、なんて
考えていたが、やっぱり行ったことの無い山域がい
いと、浅草岳に決定した。相棒は、今回一緒に山に
行くのは初めてだが、抜群の持久力と評判の坂本さ
んである。彼女はスキーが出来ないということだが、
今回の山行につきあってくれるという。今年は雪が
少ないということで、滑走条件が気にかかるが4月
のうちなら大丈夫だろうと下館に集合した。

会津西街道を経由して奥只見、叶津に入る。浅草

岳登山口は全く雪がない。小一時間くらいは歩きに
なりそうだ。テントを張って仮眠をとる。絶好の登
山日和だが、6時頃にのんびりと出発する。小1時
間も歩かないうちに雪が現れる。最初から安沢は雪
が少なそうなので、登山道を忠実に上るが、平石山
の直下で少し迷う。このほかは大きな問題なく稜線
を忠実にたどるが、さすがに全て雪が付いているわ
けではないので、付けたり外したりの繰り返しでう
んざりする。坂本さんははじめからスキーのない分
軽快に歩いてゆく。天気は最高でサングラスをかけ
ていても目が痛い。最後の大斜面はいい加減うんざ
りさせられたが、滑走のことを考えて辛抱する。山



浅草岳山スキーにて・・中居



浅草岳山スキーでの坂本

頂は少し藪っぽく、スキーをデボして11時前に到着。坂本さんは30分くらい前には山頂についており、登りに関してはツボ足の方が速かった。

まだ昼にも早く、雪も締まっている。さて滑走である。シールを剥がしたり、準備しているうちに坂本さんはあっという間に点になっていた。しかし滑り出してしまうとスキーは魔法の道具である。安沢の下りで当初は坂本さんも沢に下ってくる予定が、下るポイントを過ぎてしまい別々になってしまった（結果的にはツボ足ならばもとの登山道を下るのが最も速い）。登山道は特に問題となる所もないので、こちらは安沢を豪快にジャンプターンで切り返しながらかつ下る。沢の水が見えた所で休憩。雪解け水が冷たくてうまかった。しかし、いつものことだがここからが山スキーである。対岸に渡る所ではスノーブリッジなど何処へやら。靴を脱ぐのもめんどろなのでそのまま川を渡り、さらに雪解けでどろどろになった登山道を下って2時頃駐車場に到着。駐車場では坂本さんが待ち

くたびれていた。結局下りもツボ足の方が早かった。

帰りは奥只見の新築と思われる温泉に浸かって帰った。温泉は良かったのだが、男湯の中に頓死している人がいたりして、気分良くというわけにはいかなかった。それ以外は気分良くドライブを楽しみ、懐かしの矢板市ではいきつけだったラーメン屋によって（珍満といって矢板市役所の南側、通りに面してある店です。ここの天津麺がうまい！）最高の休日を稀めくくった。浅草岳は新潟側の斜面も素晴らしいそうなので次回は反対側から攻めてみたい。

（中居 記）

高崎インターで高橋さんと合流して、佐久経由

'97 春山合宿前半－劔岳八ツ峰主稜

1997. 4. 29～5. 1

パーティ L. 古山正文、高田暢年、澤田仁

今年の春山合宿は遠く宇部から高田OBを迎え、劔岳で行なわれた。メンバーの予定がはっきり決まらず、行動計画、パーティ分け、食料装備等の仕分けは入山直前に行なわれ、結局入山は3パーティに別れることになり、先発の我々は後続パーティと合流するまで、八ツ峰主稜を登ることになった。劔沢から室堂まで楽ちんし、ベースのテントを別山平に張った。風が強く当たる場所なので1時間はどかけて雪のブロックをしっかりと積んだが、八ツ峰から戻ってきた時には跡形も無くなっていた。張り終えてから、八ツ峰末端へと下って行った。源治郎尾根末端に4～5パーティ、八ツ峰1峰3稜末端に3パーティ程のテントが張ってあった。我々は三稜の末端取り付き付近に幕営した。

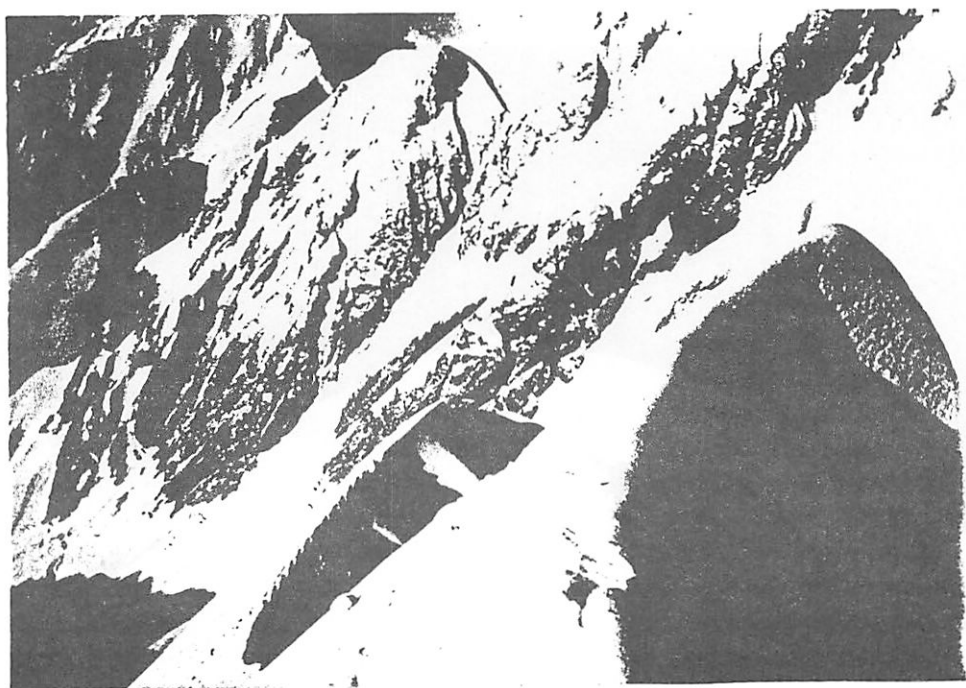
翌日登攀の支度をして5時に出発、劔沢を渡って三稜に取り付いた。P1直前の岩壁基部から左のブッシュ帯に入りトラバースして滑り台ルンゼを登る。ルンゼ上部に水流が露出している箇所があった。ブッシュの出ているP2を越え、春の尾根だというのにクレパス状の部分を通り過ぎたり、ブッシュに囲まれながら登ったりして進む。この頃にはPいくつなのかははっきり判らなくなっ

てしまったが、遙か遠くにI峰が見え、その直下に1パーティ登っていた。一カ所2ピッチロープを出したが澤田はお客様でいるつもりらしかった。I峰の手前で休んでいると天気が崩れだし、急いで雨具を着る。せめて雪にとの願いもかなわず曇となった。雪崩の起きそうなI峰手前の斜面を急いで登り、ブッシュの中を登るとI峰頂上に出た。I峰の10m程の下りと、I峰とII峰の間で30分程下りと、及びII峰とIII峰との下りで懸垂下降を行ない、更にIII峰の下りでクライムダウンを行なった。V峰は尖っていて、いったい何処から登るのだろうと思ったが、頂上を踏まずに岩峰基部の支点から長次郎谷側に懸垂下降を2ピッチで、雪壁に降り立ち、少しクライムダウンしてからトラバースしてV、VIの科尔に着いた。全身ずぶ濡れで少し早かったけれどここでビバークすることにした。雪洞はあったが、3人では小さいので、テントを張った。何年か前に高田さんと共に行った北鎌尾根もやっぱりこんな天気で、下着や登山靴の中までぐっしょりと濡れ寒かった。高田さんと一緒に春山はその時以来のような気がする。

次の日は、前日と異なり春山日和となった。しかし寒冷前線通過で気温が下がり、テントから出



ハッ峰主稜・・古山、高田、澤田



ハッ峰主稜

てしばらくすると、濡れていたハーネスや半乾きの雨具はバリバリと凍りついた。Ⅵ峰は少し登ったところで3ピッチ程ロープを出した。Ⅵ峰の下りは残置支点で数m懸垂し、Ⅶ峰下りで竹ベグを埋め三ノ窓側に20m程懸垂し、数mトラバースした。Ⅷ峰の登りの急斜面は雪が腐って悪かったので、4ピッチロープを出し、八ツ峰の頭に着いた。池ノ谷乗越へは30m程の懸垂でおりトラバースになった。後

は別山平のベースを目指して、前劔からの下りが急雪壁だったので、慎重に通過した。結構疲れてベースに戻った時には、告、紺野の中発パーティが解けてなくなってしまう雪のブロックを積み直している最中だった。

(古山 記)

劔岳 源治郎尾根

1997. 5. 2

パーティ L 古山正文、澤田仁

5月2日、天気の良い早朝、劔沢の幕営地から源治郎根に向かった。

劔沢を下り、告、紺野の八ツ峰パーティと別れ、長次郎谷出合から源治郎尾根に取り付く。1峰への登りはひたすら長い急登が続く。自分のベースはなかなか上がらなくて、古山さんはまたたく間に見えなくなってしまう。1峰の頂上で小休止を取る。視界は良く、八ツ峰パーティがⅥ峰を登っているのがはっきり見える。無線交信の時間だったが、その余裕はなさそうだった。

I峰からのスノーリッジをクライムダウンし、I峰との間のコルに出る。急な雪壁をしばらく登り、II峰に出た。II峰周辺は両側が切れ落ちたナイフリッジ状で、通過するときに緊張した。II峰を懸垂下

降し、またしばらく雪壁を登高すると、劔岳の頂上に出た。前日と同様に、前劔を経て、劔沢へ戻った。午後1時ぐらいには幕営地に到着し、案外早く終わった。

(澤田 記)



劔岳春合宿 ハッ峰上部

1997. 5. 2

パーティ L 告広道、紺野哲雄

最初に書いておきますが、今回の山行タイムを書いた紙を無くしてしまったので、参考タイムはありません。

つくづく、シモンのアイゼンにはついていないようだ。2年前の劔岳夏合宿の時には、ベルトを止めるピンがいきなり飛んでしまい冷や汗をかいたが、今回の合宿ではいざ出発という時にワンタッチアイゼンの金具が欠けてしまった。

「今回の山行は、中止になるのか？」

そう思いかけた時、予定日程を終え本日下る高田氏が、

『俺のアイゼンを貸してやるよ。』と言ってくれた。しかし運悪く、アイゼン調整用工具を誰も持っておらず調整できない。

『それだったら、靴ごと貸してやるよ。』

高田氏の好意にあまえて履いてみるがきつい。登るのは上部だけとは言え、大物のハッ峰主稜。このまま行ってもいいものか不安で結局40分ほど出発時間が遅れてしまった。慣れないうえに、キツイ靴で膝が笑いながら取り付き目指して劔沢を下って行った。

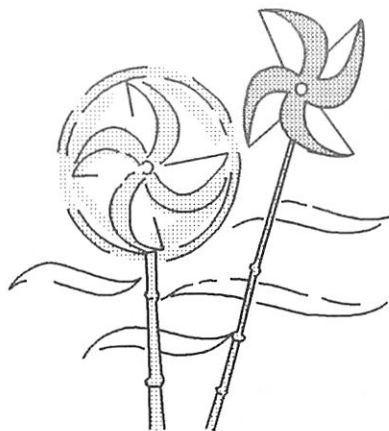
長次郎谷出合いで本日、源治郎尾根に登る予定の古山、沢田パーティと別れハッ峰5.6のCOLを目指して登って行く。途中、2度休憩を入れ5.6のCOLに到着。やはりCOLは風が強い。ここで行動食を取ることにする。今思えば、ここで行動食を取った

のが、いやとりすぎたのが間違いだった。上へあがれば、ハッ峰の頭まで行動食を取る暇などないだろうと思いたくさん食べ過ぎた。核心部の六峰の登りを終えたあたりで、核心部を越えたことで緊張感が途切れたせいもあるのか腹の具合がおかしくなってきた。しかし痩せた稜線なので、キジが打てる場所もなくガマンすることにする。はっきり言って懸垂下降などしかなかった。懸垂場所など飛び降りて早くキジが打てる場所に行きたかった。が、まどろっこしい懸垂を2回と、雪がくさってきたため登るのが危険になった七峰の登りでザイルを使った。ようやくハッ峰の頭に着いた。ここで大休止をとる。この辺りの高度になってくるといつもの頭痛も始まってきた。

池ノ谷乗越から劔本峰までの登りは今までにない苦しい登りになった。頭痛と出したのにもかかわらずまだ痛い腹と豆ができていであろう足で本当に参ってしまった。

本峰を越えてからの下りでも30分に1度の割合で「休も。休も。」と言う自分に最後まで付き合ってくれた紺野氏に感謝するとともに、翌日いっしょに念願の源治郎尾根に行く予定だった本図氏の予定を変更してしまい、登れなかった氏におわびを申し上げて終わりとします。

(告 記)



前劔東尾根右稜

1997. 5. 3

パーティ L 本園一統、紺野哲雄 & L 古山正文、坂本恵美子

この尾根は源治郎尾根やハッ峰と比べると、スケールが小さく見劣りがするためか、イマイチ人気がない。しかし主稜線から眺めると、鋭いナイフリッジと雪壁を連ね、特に右稜はかなり良いルートではないかとと思われる。2パーティに分かれてアタックすることにした。

尾根末端の雪壁から取り付く。少し右（平蔵谷側）よりに登り雪稜に出る。傾斜が落ちた所で左の方から来ているトレールに合流する。小さな壁につきあたった所でアンザイレンするが、今年は雪が少ないのだろう、ブッシュがでている。鋭いナイフリッジを2ピッチで過ぎると尾根はブツンときれてしまった。ここをブッシュ支点に10mの懸垂で降りるとトレールはなくなっていた。先者は降りたらしくトレールは平蔵谷に向かってついていた。いよいよここからラッセルが始まる。急なブッシュと雪壁の尾根を登る。展望は素晴らしく、劔頂上からハッ峰、そして自分達のテントまで見える。左稜は変化に乏しく簡単そうだ。上部はビレー支点がなく、小指程の小さなブッシュとスタンディングアックスビレーを多用する。雪質が悪く足元から小規模雪



アンザイレンして“さあ、行くぞ!”

崩が誘発する。後続の古山パーティにそれが覆いかかるのが心配だ。雪崩が発生すると下の方から“おっかねー”と古山の悲鳴が聞こえてくる。古山よ許してくれ。十分注意しているんだが起きてしまうのだ。グサグサの雪は足元が定まらず、いつ足をすくわれるかわからない。こんな中でずっとツルベで登ってきたパートナーの紺野は安定した登りをしている。だいぶ上手くなったと感心する。となりの源治郎尾根を登っているパーティは我々よりずっと遅く取り付いたのに自分達より高い所に見える。この雪質とラッセルでは時間がかかってもしかたあるまい。やがて核心部といえる両雪庇にでた。紺野に右側に行くよう指示したが、行けないとの返事。じゃあ左を行けやと言うと、左も行けないとのこと。そんじゃあ間中しかねえな。などと会話を交わす。紺野

はしばらく考えていたが意を決した様に登り出した。ビレーはスタンディングアックスビレーであり、ここで落ちたら止めることはかなり難しい。万が一に備えてどうするかあれこれ考えているうち紺野はここを登り切った。ここは2ピッチで抜けたが、かなり緊張した。約15ピッチ位の充実した登攀であった。ゴールデンウィーク頃であると、源治郎尾根やハッ峰は行列だが、このルートの内容は困難度といえ面白さといえ、けして引けをとらないであろう。

古山パーティを待ちながら昼食を取る。普通、登攀終了すると話が弾むものであるが、紺野はあまり喋らない。話しかけるとボンボンと答えるが余計なことは言わない。でも嬉しいであろうことは表情でわかる。実力派クライマーにはこういうタイプが多い。彼もこのタイプなのであろう。将来を期待でき

る一人である。

ベース(4:36)ー取付(5:09)ー終了(12:23~1
3:39)ーベース(15:04)

(本図 記)



最終ピッチの登攀

平ヶ岳彷徨

1997. 5. 3~5

パーティ L 松原丈夫、吉田信一、中島淳、木村一

日本百名山ハンター松原大先生から平ヶ岳への山スキー登山に誘われたのは、正月の八ヶ岳合宿の時である。しかし、山スキーの道具はとうの昔に無くしてしまっているの、山スキー購入の費用捻出から頭を悩ませなければならなかった。幸いにも、山スキーのプロフェッショナル中島さんが新しい山スキーのセットを購入したので、古い山スキーセットを譲り受ける事が出来たので、残った購入予算で山へ入る事が出来た。感謝！。感謝！。

鳩待峠へ着いたのが今朝の3:00頃、約2時間の仮眠後6:00出発。鳩待峠の売店の横からスキーを使用して林の中を滑降開始、あまり快適な滑降ではない。途中からスキーを外して背のザックに付けて歩きだしたが、昨夜(今朝)のアルコールが抜

けきらず体が重い、約1時間の行程で山ノ鼻到着。ここで山スキーを引っ張る細紐を忘れた事に気付く、小屋隣の工事現場に落ちていたビニール紐を調達したが、これが今後大いに役立つ事になるうとは・！。

休憩後、尾瀬ヶ原の端を横切り、更に猫又川の左俣を徒渉して大白沢山に続く緩い尾根に取り付いた。高度が上がるにつれツゲの大木の樹林帯を縫うようにして登るが、メンバーの1人が徐々に遅れるようになってきた。今日の予定は大白沢山を越して、白沢山に続く尾根上の幕場までの予定だが、この調子では無理と判断してツゲの樹林帯の中でテント設営、14:30。

翌日は朝からガスで視界が悪かったが6:00出発、高度が上がるにつれ視界も約30m位になり、

帰路のことを考慮して赤布の代わりに赤いビニールテープを木の枝に付けての登高。磁石で方向を確認しながら大白沢山を右から巻き、テント設営予定地に到着。ここでバテ気味の1人を残し、大白山に続く緩い尾根を登高したつもりが、なんと！ススケ峰の頂上。時計を見ると11:30。今日中に平ヶ岳まで行くのは無理と諦めて下降開始。しかし今度は平ヶ岳に緩く尾根に入り込みそうになり、メンバーの1人が待つ設営予定地にたどり着かない始末。広い尾根上でのガスによる視界不良で頼りになるのは磁石と地図のみ、身にしてみても痛感した。

メンバーの1人と合流後スキーで下るが、4人でのツルベ滑降。大白沢山を大きく巻き、肩に出る頃には雲の切れ間から太陽がのぞくようになってきた。ここで明日の行動について相談。明日は4:00起床、5:00出発で再度平ヶ岳アタックと決定しテントまで一気に滑降、帰着後テントの外で宴会開始。話題は今日の反省ばかり！！。

5/5は未明から雨、更に昨日同様視界不良。今日の平ヶ岳アタックは中止とし、雨が小降りになったらテント撤収と決定。9:00テントを撤

収し下降開始、樹林帯の中をスキーで下るがあまり快適な滑降ではなかった。

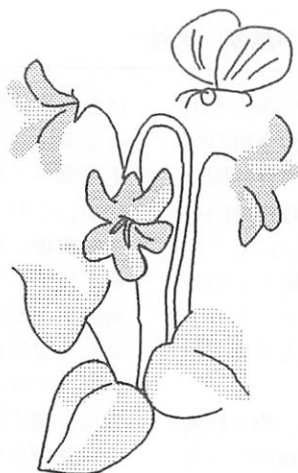
昨日の徒渉地点は川が増水し倒木の上を渡る事は不可能なので、靴のまま水のなかに入り徒渉したが、鳩待峠に帰着するまで靴の中は水がしみだし不快だった。スキー兼用靴では徒渉は不向きだと痛感した。尾瀬ヶ原の小屋でビールで乾杯の予定が小屋はまだ営業を開始しておらず、休憩後、鳩待峠への最後の登りにかかったが、途中テレビの撮影隊に出会ったので後日のお楽しみに！。

(後日談)

松原大先生が、今回敗退した平ヶ岳に5月末単独で再アタックして見事登頂した事を後日聞いた。

また名雪パーティーも4月末に平ヶ岳に見事登頂との事。百名山パワーは凄い。

(木村 記)



那須岳 苦土川 井戸沢

1997. 5. 12

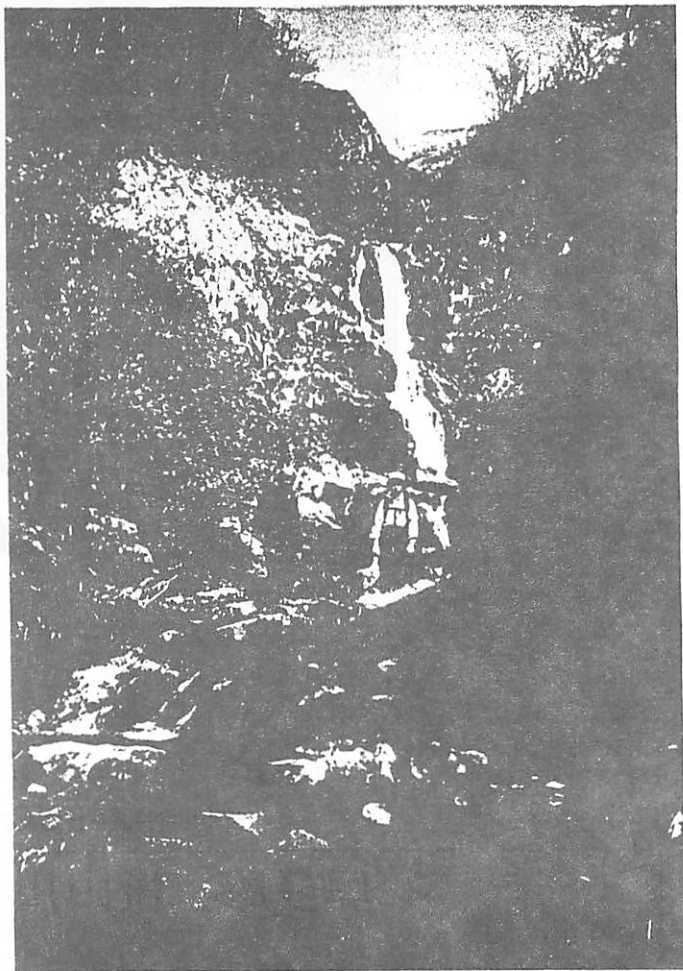
パーティ L 本図一統、村上晴美、坂本恵美子

四WDかどうか聞かれたという、三斗小屋宿の廃屋を見ながらの林道はかなりガタボコで大きな石もごろりとしているほどでしたが、車に関してはおおらかな本図さんは構わずぐいぐいと走らせていきました。

翌朝は水の冷たさを考慮してゆっくり出発をしました。シューズの底を濡らせてから歩き出します。今まで沢と言ったら濡れないように避けるのだったので、何だかうれしい気分がいっぱいでした。岩がゴロゴロとしている川原をしばらく行くと小さな滝などが見られました。いくつかの滝は高巻き、その際はザイルを出してもらうこともありました。やがて雪渓の残っているところを過ぎると水も枯れて稜線もすぐそこに見えました。井戸沢は名前から持つ印象とは違い、明るく開けた沢で、途中振り替えると水の流れが段々となって見渡すことが出来るのでした。

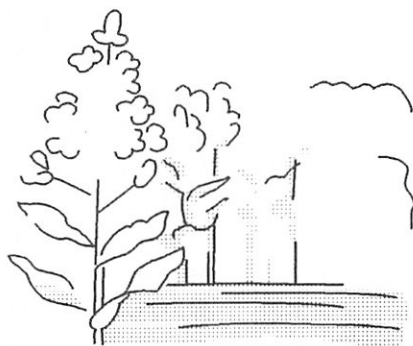
登山道に出るともう気持ちは三斗小屋温泉です。そこの穴蔵のような温泉でさっぱりと汗を流し、後はのんびりと歩いて車まで戻りました。

車(7:19)ー第一の滝下(7:38~7:51)ー二俣(9:19~9:46)ー流石山(11:04~11:38)ー大峠(12:19)ー三斗小屋温泉煙草屋(13:34~14:26)ー車(15:06)



苦土川井戸沢…大滝下にて

(坂本(調))





苦土川井戸沢・稜線直下の雪渓にて

奥多摩 後山川 青岩谷

1997. 5. 18

パーティ L 本図一統、坂本恵美子、村上晴美

奥多摩ははじめてである。世界に名だたるTOKYOもこんなに西の方まで来ると、とても山深く爽やかである。林道終点から橋を渡り、すぐに入渓。ルート図集によると、この沢は人気度抜群4ツ星なのであるが、今日の入渓者は我々のパーティだけのようである。「青岩ノ大滝」まで滝の登攀も特になく、ただ歩く。入渓から1時間が過ぎ、ようやく核心部の大滝があらわれる。水量も豊富であり、落差25mでなかなか見ごたえがある。これを左岸から巻く。

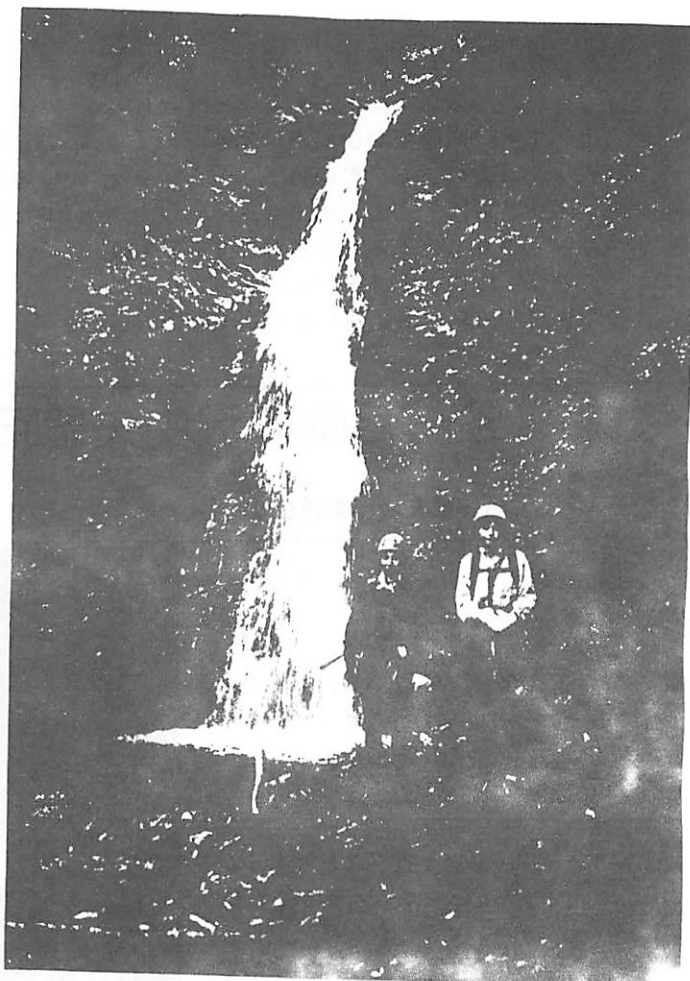
大滝を越えて1時間程で二俣に到着。ここで少し早めの昼食タイムとなる。久しぶりの山菜てんぷらとそうめんのメニューだ。料理はシェフ本図におまかせして、私は寝る。濡れた服が乾いてい

く間、けっこう寒さを感じる。沢用の速乾性の服が欲しいなあ。沢の音を聞きながら、木洩日の下で優雅な食事、ああなんて幸せなことだろう。是非、泊りの沢登りを今シーズンはしようと思う。

二俣は左の獅子岩谷を進む。いくつかのナメ滝を登り、水流が消えた後急登がしばらくあり、「稜線まではまだまだあるな～」と思っていると、ふいに登山道があらわれる。雲取山登頂は、往復だと時間がかかりそうだったので、そのまま三条ノ湯に下る。少しぬるい湯につかりながら、紅葉の頃はさぞかし美しい眺めだろうと、窓から外を眺める。今は萌え始めた緑が眩しい季節、初夏の蟬の声が山々を静かにうるおしていた。

林道終点(7:10)ー青岩ノ大滝(8:20~8:55)
ー二侯(10:00~11:30)ー登山道(12:30~12:4
5)ー三条ノ湯(13:30~14:20)ー林道終点(14:
35)

(村上 記)



青岩滝にて

月山山スキー山行

1997. 5. 24

パーティ L木村一、中島淳、菊池光夫

水曜日の集会で、週末山スキーへ行こうとの計画で、飯豊の石ころび沢か、月山のどちらかをプランにあげたが、初心者菊池の為にベテラン2人組が折れてくれた。

彼ら2人は春先より山スキーにはまっていて、ゴールデンウィーク中も尾瀬より越後平ヶ岳山スキーに誘われたが、ゴールデンウィークは海外ブームなので、乗り遅れるなどばかりヨーロッパアルプスにでもと考え、シャモニーに居るOBの宇井さんにコンタクトをするが、つながらなかったのも山行計画を後日に持ち越すことにした。でも私の休みはカレンダー通りなのでちょっと無理だったかな。

前日より天気が良くなかぬと決めかねていたが中島氏の一声で決定した。道中は小雨であったが山形道より雨も上がり、茨城より5時間で着く、早いものである。一昔だったら月山へは前日の夜で翌日の空

が少し明るくなった頃着いたもんだと中島さんが説明してくれた。少しビールをのみ、友との語らいに花を咲かせ、仮眠を取り早朝一番のリフトを使い月山を目指す。天候は曇りだった。朝の1時間ぐらいは雲も時々切れて遠く日本海も見わたせた、が途中より強風が吹き菊池が亀になり始めた。回りは濃いガスに覆われ木村氏が心配して少し下りて来てくれた。這松帯の陰で休憩を取りスキー板をデボする。

これより岩のガレ場の為、スキー靴では滑って非常に登りにくい。10分から15分で小屋に着き、これより最後の登り20分で月山神社へ到着。雨交じりで強風の為、拝んで急いで下の小屋まで下る。そこで昼食を食べる。その後スキー板をデボしてある所まで下り、スキー板を履き、下り始めるが、回りは非常に濃いガスで5mも離れると完全に見えなくなってしまうので離れないようにして下へ下るの

には楽なのだが、下りすぎるのが恐く疲れるが、なるべくトラバース気味に磁石で方向を確認して下る。山スキーの醍醐味が少しかけた気がした。でも最後は、月山ゲレンデの山頂よりからは豪快にゲレンデへと飛ばすことが出来た。

山スキーでのガスの恐ろしさを身を持って体験できたことは、今後の山スキーにも活かされるだろう。という訳で駐車所に着いたのが1時頃だっ

た。途中、寒河江の辺りではハウスのサクランボが実っており、道路で立ちしょんのフリして、一粒と思うが育ちがいいので止めた。

後は、高速道を飛ばして帰ってきたので夕方の6時には現着した。

(菊池 記)

谷川岳幽の沢中央壁正面フェース

1997. 6. 8

パーティ L 古山正文、新美達也

今年初めてクレッターシューズを履いて岩登りをするという状態でいきなり谷川岳？大丈夫かな？古山さんにとってはウォーミングアップ程度かもしれないが自分にとっては4級というのは今までの最高だぞ？などと逡巡しているうちに当日が来てしまった。一の倉出合に到着するや、翌日に備えてすぐ寝た。

翌朝4時起床、夏至に近いこともあってさすがにもう明るい。幽の沢出合から沢沿いに登り、雪渓を越えて二俣にでる。そこから雪渓を左側からまいてカールボードンに到着した。途中、ときどき雪が崩れてびっくりする。ここから登攀具をつけて登りはじめた。最初の4ピッチはすべて古山さんがトップを引いた。出だしはただのガレ場だったが、トウフ岩を右から左上して凹状になるあたりから斜度がきつくなってきた。3ピッチ目のフェースは下から見るとたいしたことなく見えるのだが、逆層のホールド、スタンスが多く、たまに順層のものは体重をかけるとみごとに剥がれてしまう。ぐらぐらするスタンスを上から押さえつけるようにして乗っていった。4ピッチ目も同じような状況だった。ここはハン



中央壁正面フェースにて

というほどではないがかなり傾斜がきつく、そこを脆い岩に注意しながら登るので結構神経を使った。ついでに足がミシンを踏み始めて、自分の体力のなさが情けなかった。5ピッチ目からは一応つるべで行った。ルート図ではここから先すべて

Ⅲ級、お～楽勝じゃん、などとたかをくくったのだが、残置支点が非常に少ない。特に凹状のスラブのところは20mランナーなしという感じが続いて、グレードの割に緊張した。やっとこの頃になるとクレッターシューズが足になじんできて、来週の山行

ではもうちょっとまともに歩けるかななど
と思ってきたところで登攀終了。最後に草
付きを登って稜線にでた。堅炭尾根から芝
倉沢に下降、アイゼンをつけて雪渓を歩き、
出合でのどを潤したあとで、一の倉出合ま
で戻った。

一の倉沢出合駐車場(5:00)ーカールボーデ
ン(6:40-6:50)ー4ピッチ終了(10:00)ー
稜線(11:20-12:10)ー一の倉沢出合駐車場(
14:30)

(新美 記)



中央壁正面フェースにて

中川川 東沢 本棚沢

1997. 6. 8

パーティ L 本図一統、澤田仁、坂本恵美子、高木博行

丹沢へ行くのは今回初めてでどんな沢か期待しな
がら高速道路を一路丹沢へ向かった。林道へ入ると
鹿が歓迎してくれた。

翌朝7時出発。最初に現れる6m滝は、難なく越
える。次に現われた12m滝は、中段で左ヘトラバ
ースし、かぶり気味の岩を直上するがホールドがし
っかりしており、ガイドブックに書かれている程に
は、難しく感じなかった。小滝をいくつか越えると
本棚沢の核心の25m滝だ。澤田さんがトップで登
っていくが、ルートファインディングに苦労してい
るようだ。シャワーを浴びており、寒そうだ。セカ
ンド以下は、ルートがわかっているし、上から確保
されたいるので精神的にもトップと比べれば楽だ。
澤田さんご苦労様でした。本棚沢の上部も10m、
6m、5mと続くが問題はなく通過。やがて20m

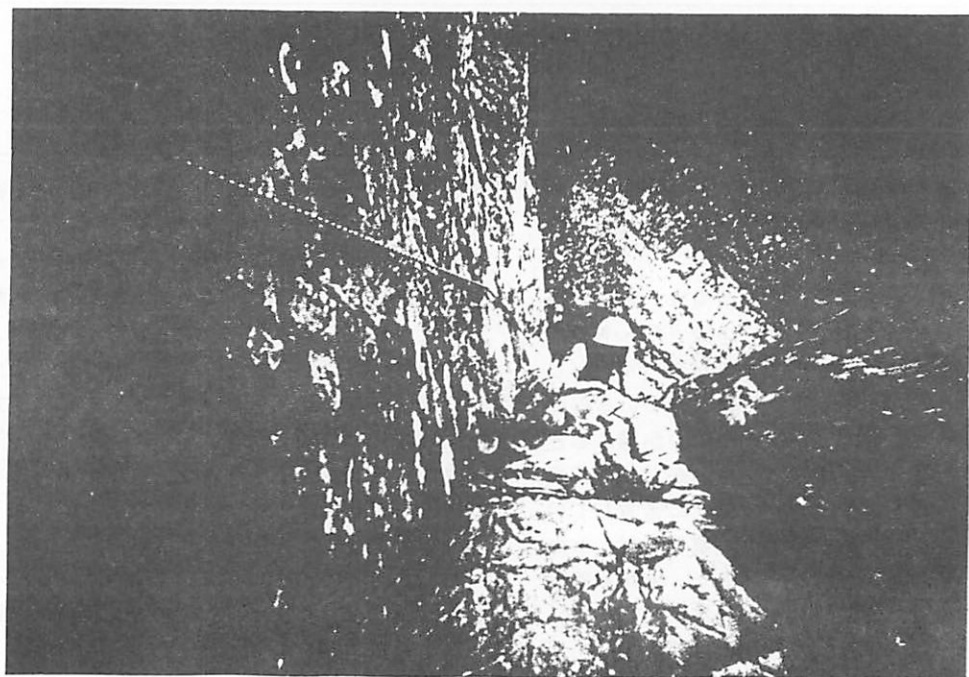
滝も現われる。左側の乾いた岩を登るのが高木は
2度ぶら下がる。スラブなどのフリクションで登る
ところは苦手で練習の必要性を感じる。20m滝の
上部へ出ると、水は濁っていて、次の40m溜棚は、
岩登りのゲレンデのようだ。しばらく進むと、上か
ら人の声が聞こえてきた。久しぶりの山行で少し疲
れていたのもホッとする。登山道に着いたのだ。高
木は沢登りで稜線まで抜けたのは始めてなので気分
爽快だ。登山道脇で昼食を取り、登山道を下ると林
道に出る仕事道を発見、あっさり車の所に出てしま
う。本図さんはつまらなそうだった。

出合(6:58)ー終了(12:16~12:44)ー出合(13:20)

(高木 記)



本棚をリードする澤田



酒棚に登る坂本

平標山

1997. 6. 15

パーティ L 村上晴美、坂本恵美子

通り道ということもあって村上さん宅の近くの県信で待ち合わせた。今回の山は平標山だ。

谷川岳と苗場山の間くらいにある。村上さんの言う、物差しで計った道から前橋を通過して登山口まで向かうことになった。

村上さんの思惑通り、この山域は花がよく咲いていた。花の名前なんて殆ど忘れていたこの二人には、他の登山者がちゃんと教えてくれた。そうそうこの月とはとにかく人が多かったのだ。知っている人にまで会ってしまった。

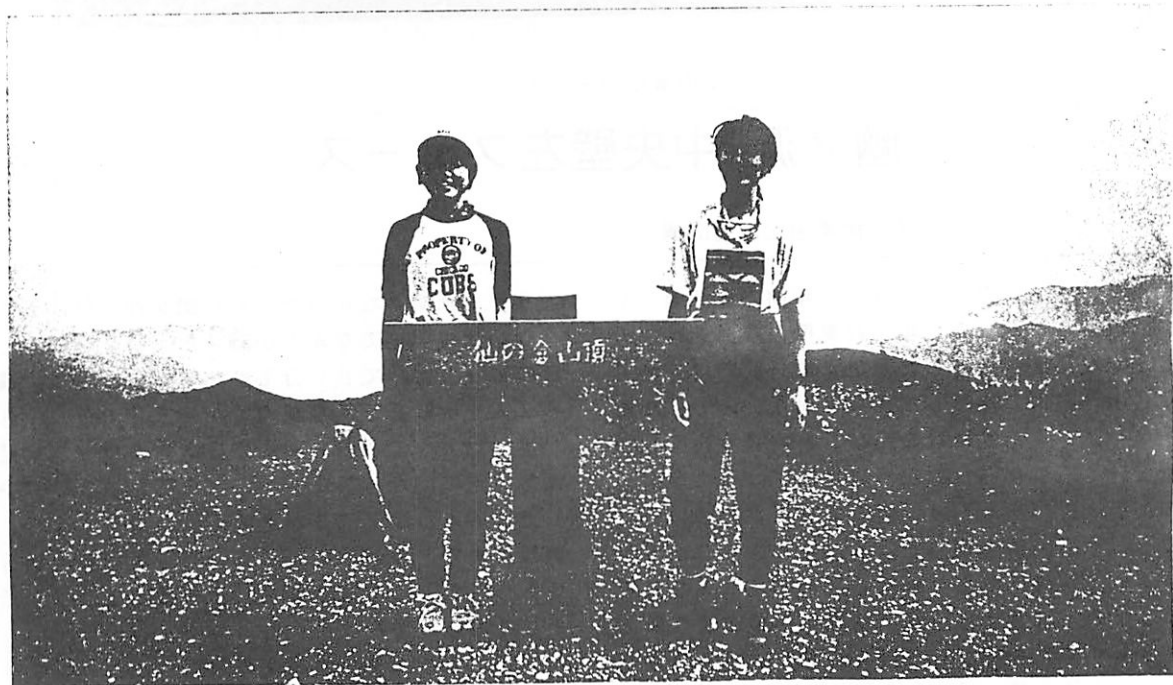
ちょっと足を伸ばした仙ノ倉山の山頂では失礼な事を言う人もいたな。私たち二人を見て“親子？”なんて聞いてくるんだもん。思わず“あっ、はい。”と答えたら村上さんが怒り出して、その辺にいた人たちにはずいぶん笑われた。この日の

村上さんはシャクナゲにこだわっていた。淡い桃色のシャクナゲは、山一面に咲き競うかのようで、村上さんは登山道を外れて、写真撮りに夢中だった。天気も上々で虫もブンブン飛んでいた。

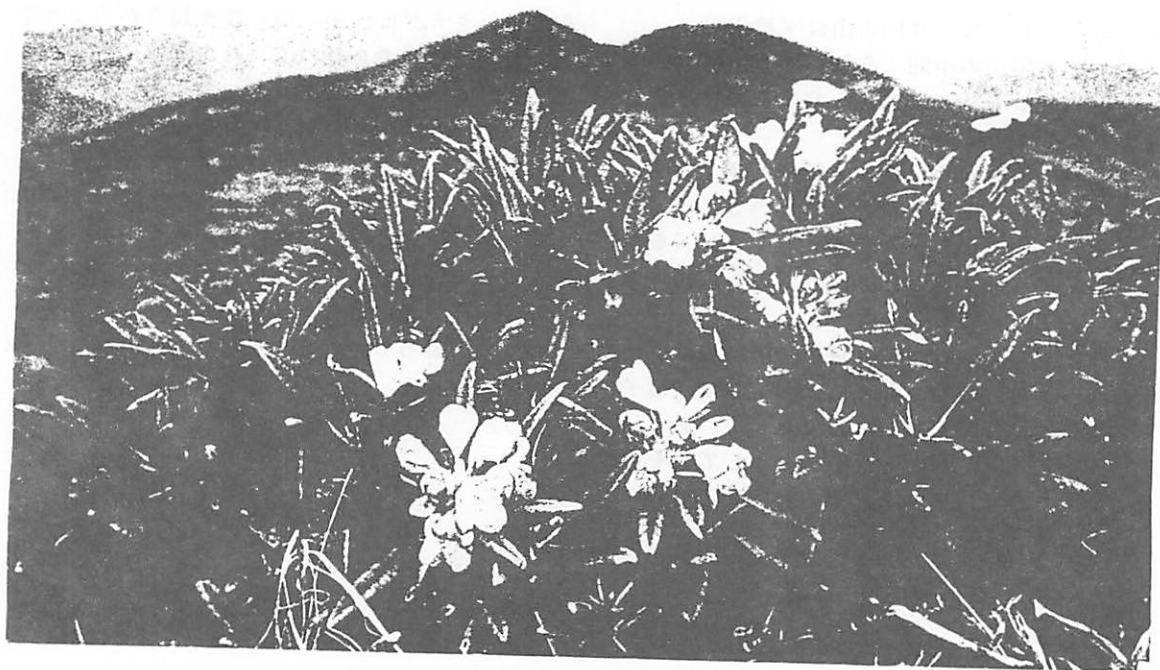
帰りがてら、温泉に立ち寄った時に気が付いたのだが、村上さんの足にダニがくっついている。虫は飛んでいるばかりじゃなかったのだ。顔を肉の中に埋めている様子は憎々しい程だったがどうにもできない。

『このくらいのことは……』と村上さんはアフリカでの恐ろしい出来事を数々聞かせてくれた。

(坂本(恵) 記)



仙の倉山頂にて



仙の倉のシャクナゲ

幽ノ沢 中央壁左フェース

1997. 6. 15

パーティ L 古山正文、新美達也、告広道

左フェースを登ることは、1年前にも計画したが雨に降られたため烏帽子沢奥壁の変形チムニーのみで温泉に行ってしまった。幽ノ沢には、2月に石南花尾根に挑戦したきりしかないの、なんとなくイメージ的にはのんびりと岩登りを楽しむ所という感じだった。沢沿いにはブロックがたくさん引っ掛けており、落ちてきそうで怖いのであるべく高い所を選んで歩く。T1の60m下からザイルを付けて登り始める。今回は3人なのでトップの入れ替えはせず、猿回しの猿のように、自分がザイルを伸ばして行く。2ピッチを終えていよいよ核心部。見るからに傾斜がキツイ。支点に導かれるように登って行くと美しいZを描けた〜はずだったが、左に回り込み過ぎたらしくやたらに難しい。ルート図では、4級上になっていたがとてもそんなふうには思えなかった、と言う

より思う余裕もなかった。岩に顔を押し付けるような必死の思いでなんとか越えた。時計を見るとこのピッチだけで80分もかかってしまった。残る2人を上にあげて相談するが、どうやらルートが違ったようで右斜め下にT2らしき確保点が見えた。上に向かってボルトが打ってあったので少し登って見たがアブミが必要そうなので止めた。確保点までトラバースすることにした。左上するランベをたどりT3に到着。その後、1ピッチでどこでも登って行けそうなスラブに着いた。ホールドがたくさんあり快適な登攀だったが、いつのまにか傾斜がキツくなりいきずまってしまう。左にある灌木帯に逃げる。灌木をつかみながら強引に登っていくが、やはり傾斜がキツくなりいきずまってしまう。しかたなくクライムダウンし、左端の左方ルンゼぞいの稜を登っていく。そこから

2ピッチで終了。

一ノ倉出合駐車場(4:30)ー取り付き(6:10)

ー終了(12:40)ー一ノ倉出合駐車場(16:30)

(新美 記)



核心部手前にて…告、新美



2ピッチ目にて
- 26 -

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman NO.144, 1997, 4 B5 26P 浦和浪漫山岳会
澄川スキー場~刈田岳~熊野岳、小豆温泉~三つ岩岳、大白川~足沢山~太郎助山、土樽~万太郎尾根~万太郎山、真名板倉山、第一尾根~大源太山~ヤスケ尾根下降ほか
- ◎Rohman NO.145, 1997, 5 B5 66P 浦和浪漫山岳会
春合宿・4パーティに分けて末丈ヶ岳に集中、只見尾根~浅草岳~平石山~入叶津、仏岩峠~安能川岳~小出俣山~マナイタグラ~谷川岳、宝川~雨ヶ立山~大烏帽子山、両神山ほか
- ◎Rohman NO.146, 1997, 6 B5 34P 浦和浪漫山岳会
〇B山菜山行、御池~燧ヶ岳、叶津川、会津・唐松山ほか
- ◎月報・ZAC NO.185 1997, 2, B5 14P グループ・ゼフィルス
大渚山、雨飾山、博士山~三引山~神籠ヶ岳、高畑スキー場~袴腰山ほか
- ◎月報・ZAC NO.186 1997, 3, B5 8P グループ・ゼフィルス
大持山~武甲山、蔵王ロープウェイ~熊野岳~蛾々温泉、不忘山ほか
- ◎月報・ZAC NO.187 1997, 4, B5 16P グループ・ゼフィルス
会津駒ヶ岳、山毛驢沢山~古町丸山、守門山、越後駒ヶ岳、飯豊・西俣峰~飯豊鉱泉ほか
- ◎月報・ZAC NO.188 1997, 5, B5 12P グループ・ゼフィルス
西上州の山から朝日連峰の山、槍ヶ岳ほか
- ◎わらじ NO.493 1997, 4 B5 20P わらじの仲間
サブ合宿・大源太山集中、五竜岳~黒部川~剣岳ハッ峰、仙ノ倉北尾根、男体山~小真名子山ほか
- ◎わらじ NO.494 1997, 5 B5 16P わらじの仲間
守門山、丹沢・高畑山ほか
- ◎わらじ NO.495 1997, 6 B5 22P わらじの仲間
剣岳北方稜線、ハッ峰4稜、朝日連峰縦走、雨飾山~昼間山、槍又谷ススケ沢右稜ほか
- ◎逍遥 NO.71 1997, 4 B5 20P 逍遥溪稜会
阿弥陀岳北稜、丹沢・谷太郎川太小屋川、かぐらスキー場~神楽峰往復、平標山、毛猛・足沢山~太郎助山ほか
- ◎逍遥 NO.72 1997, 5 B5 16P 逍遥溪稜会
北岳、丹沢・勘七ノ沢、川乗谷逆川ほか
- ◎逍遥 NO.73 1997, 6 B5 36P 逍遥溪稜会
春合宿特集・南紀台高の沢三本、奥多摩・倉沢谷、末丈ヶ岳、窓明山~会津駒ヶ岳、奥武蔵・川浦谷、奥秩父・東沢釜の沢、鶏冠谷、月山、大源太山山菜採りほか
- ◎Next! No.16 1997, 4 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
古賀志山きのご採り、南ア・大間川ほか
- ◎Next! No.17 1997, 5 B5 20P 山岳渓流釣り集団むげん
足尾・ニグラ沢、友好団体会報紹介ほか
- ◎Next! No.18 1997, 6 B5 66P 山岳渓流釣り集団むげん
朝日・女川、足尾・小田倉沢、湯之沢~三重泉沢、滝ノ沢ほか
- ◎とまのかぜ No.53 1997, 4 B4 P 童人とまのかぜ
五頭連峰・松平山~五頭山、南紀・梅沢、上越・荒沢山、氷ノ山搜索レポート、甲武信岳ほか
- ◎とまのかぜ No.54 1997, 5 B4 P 童人とまのかぜ
奥多摩・倉沢谷、丹沢・勘七ノ沢、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、鳥海山、大朝日岳、月山、白神山地ほか
- ◎とまのかぜ No.55 1997, 6 B4 P 童人とまのかぜ
白毛門、飯豊石転び沢、南紀・黒蔵谷、川苔谷、栗子・摺上川叶堂沢、頸城・焼山、フィリップピンミンダナオ島アボ山ほか
- ◎山紫水明 No.26 1997, 2~3 B5 10P 山旅の会

霧が峰ほか

◎山紫水明 No. 27 1997. 4~5 B5 20P 山旅の会

早春の岩手、伊南川、多摩川ほか

◎山紫水明 No. 28 1997. 6 B5 16P 山旅の会

日川曲沢、太平山地旭川滝沢、多摩川ほか

◎溪遊 NO. 93 1997. 4 B5 16P 溯行同人 溪遊会

比良・針畑川、堂満ルンゼ、南紀・小口滝本北谷、ガマ谷、鈴鹿・藤原岳ほか

◎溪遊 NO. 94 1997. 5 B5 16P 溯行同人 溪遊会

大峰・川迫川神童子谷、10周年記念山行・比良安曇谷周辺ほか

◎溪遊 NO. 95 1997. 6 B5 18P 溯行同人 溪遊会

台高・北山川北又谷、比良・鴨川八池谷、大峰・上多古川矢納谷ほか

◎すずらん通信 NO. 193 1997. 4 B5 22P 鈴蘭山の会

平標山、上越・奈良沢~下津川~十字峽、白山・大笠山ほか

◎すずらん通信 NO. 194 1997. 5 B5 22P 鈴蘭山の会

妙高・黒菱山、笹が峰~火打山~笹倉温泉、月山、白山、飯豊、剣周辺ほか

◎すずらん通信 NO. 195 1997. 6 B5 12P 鈴蘭山の会

丹沢・早戸川円山木沢ほか

会報・記録集・報告書

◎通信・植村冒険館 NO. 9 1997. A4 P 植村記念財団

◎むげん No. 9 1997. 5 B5 193P 山岳溪流釣り集団むげん

南ア・寸又川、上越・下津川、北ア・真川谷、南ア・栗代川、奥信濃・志久見川、白神・赤石川、丹沢・モチコシ沢、同角沢、奥秩父・丹波川、下田・砥沢川、上越・清津川足尾沢、棒沢、南会津・叶津、南ア・三峰川、奥多摩・川苔谷、上越・魚野川、川内・早出川、南ア・赤石沢、北ア・黒部上の廊下、奥只見・大熊沢、特集・酒にまつわる話、特集・北又谷集中ほか

以上閲覧したい方は本図まで

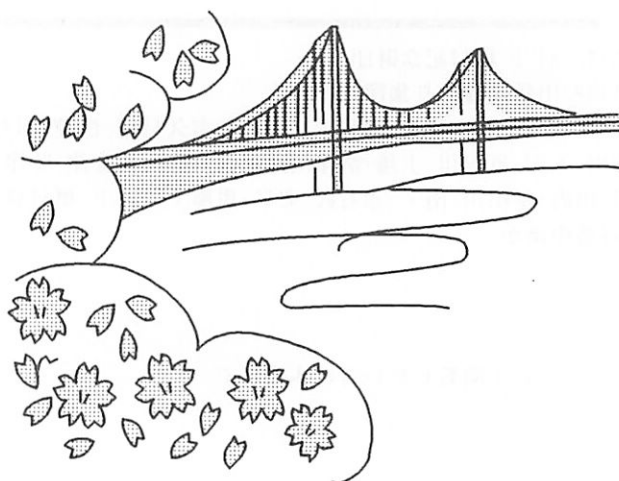
《編集後記》

今、会の状態はどうなっているか？……。編集の仕事をしていると各個人の成長がわかって結構面白い。へえ～、奴は〇〇ルートに行ったのかとか、もうトップを引いていけるのかとか、原稿を読んでいても大体のレベルアップがわかってくる。活動的に新人達も活躍しているみたいなので（もう新人ではないかも知れないが）たのもしいばかりである。この調子で、どんどんと高く上り詰めてもらいたい。

小生の方はというとうずい分と山に行っていないので、そのうちに集会に行っても、『誰だ？ありゃ～？。』と思われてしまうのではないかとちょっと不安である。それはそれで仕方ないことだと思うが…。

会の方も、例会山行も復活し、救助訓練等とかリーダー会とかも設定され、次期リーダーも育成されているようだし、かなりシステムがしっかりしてきたと思う。ゴースト会員の私でもこれからの会の発展が楽しみである。いずれは第2、第3の某M氏に皆がなるように。

（編集長）



季報 [R&V] 第25号 発行1997年 春

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城

〒306-05 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷



岩壁，沢，冬山のクライミング集団